

糸魚川直祐 名誉教授 インタビュー

日時 2021 年 8 月 24 日（火）午前 10 時～

場所 人間科学研究科本館 2F 会議室 A

インタビュアー 中道正之・三浦麻子

糸魚川先生・ご経歴

1957 年 3 月大阪大学文学部心理学科卒業、59 年同大学院文学研究科修士課程修了、米国エモリー大学ヤーキズ霊長類研究所助手を経て、64 年 3 月に博士課程を単位取得退学、65 年 1 月医学部助手、66 年 7 月文学部助手、70 年 10 月教養部助教授、73 年 4 月人科助教授。つまり人科創設前後の時期は文学部と教養部におられたことになる。

糸魚川先生ご自身が語る、ご自身の研究生活の端緒

1955 年、私は、文学部哲学科心理学専攻に進学しました。当時、心理学専攻には、基礎研究を行う一般心理学と、応用研究を行う応用心理学の 2 講座がありました。その頃、米国の影響を強く受けていた日本の心理学の基礎分野のひとつは、動物を用いた研究であり、阪大、東大、京大等の心理学研究室では、ネズミの学習実験が盛んに行われており、私の卒論のテーマはネズミの摂食行動でした。

1957 年、一般心理学講座は、国内の諸大学の研究に後れをとらず、かつ米国を凌駕するため、日本において有利に展開できるニホンザルの行動研究を野外と飼育場面において始めました。その研究を創始、指導されたのは、天野利武教授（当時）、前田嘉明助教授（当時）です。天野先生は、前任の旧京城帝国大学心理学教授のとき、同僚の黒田亮教授のサルの研究を支えました。当時、英文で発表された黒田教授のサルの研究論文は、世界的にみて心理学における初めての業績です。前田先生は、幅広い研究を行い、そのひとつが比較行動学でした。前田先生は、その後、一般心理学講座教授となり、人間科学部創設を成し遂げ、学部長を勤められました。

両先生のご指導を受け、私はニホンザルについて、また米国において、飼育チンパンジーについて、行動研究を行いました。私自身、人間の行動発達にも興味があったので、その分野の研究も行いました。

人間科学部創設に至る経緯

人間科学部は、1972 年に創設されました。それより 5 年以上前、当時、文学部哲学科心理

学専攻、社会学専攻、教育学科教育学専攻のおもに助教授の先生のなかに、新しい学部構想をお持ちの方がおられ、深夜まで研究室に残り、熱心に論議されておられました。当時、心理学専攻の助手であった私は、学部創設構想に心を躍らせ、補助用務に携わりました。

一般に、新しい組織は、既存組織に何らかの欠損や歪みがあり、その補充、是正のため、生まれます。人間科学部創設構想が芽生えた頃、学内にはさまざまな不備、不具合がありました。しかし、新学部を構想しておられた先生方は、既存組織を補い、正すというより、新しい教育研究分野を切り開くという学究としての意欲を強くお持ちでした。先生方のそのような先駆的な取り組みに、私は心を動かされました。

先生方の集まりは、はじめは公式の会議体ではなく、有志による会合でした。でも、私的な集まりではなく、会合の存在、内容は、他の先生にも認められ、理解されていました。この会合は、創設申請書提出前のどこかの段階で、公式の会議体になったはずです¹。

「人間科学」についての糸魚川先生のお考えは？

創設に携わった先生方は、人間科学とはなにか、いかに教育研究を行うかについて、国内外の文献を読み、情報を集め、アカデミーカーとして真摯に論議されておられました。論議の内容は分かりませんが、その一部を後から拝聴し、また他の多くの先生から学び、私自身、人間科学を次のように捉えるようになりました。

人間は、生き方が問われる存在です。生き方は、心とふるまいについて問われます。心は、内面のいとなみであり、ふるまいは、行動、所産のように外に表れるものです。大切なのは、人間は、内面のみならず、外に表れるものによって、生き方が問われることです。

科学は、正しさの探究です。科学は、真理の探究といわれますが、邪悪な目的による探究は、否であり、科学は、正しさの探究であると思います。人間科学は、生き方が問われる人間について、正しさを探る学問が緩やかなかたちで結びついた領域です。

私の分野は、心理学と比較行動学（Ethology）で、ともに人間科学であると思います。比較行動学は、ダーウインの進化論を源流とし、人間を含むさまざまな動物の行動を調べる学問で、とくに欧州では古い歴史があります。ダーウインは、人間の幼児の表情についても研究しました。

諸学の結びつきは、（１）諸学がそれぞれの特性を生かし緩やかに連携する、（２）諸学がある目標のもとに統合する、の二つに大別できます。心理学、比較行動学は、（１）のかたちで人間科学を作り上げていると私は思います。（２）のかたちは、例えば、医学です。医学は、諸学が医療という目標のため、統合されたかたちでまとまっています。（１）、（２）のかたちは、歴史的にみて、ともに存在し続けています。それは、それぞれのかたちに適応価、つまり、それぞれが生き延びる価値があるからです。

¹ その後、50周年記念事業委員会で手を尽くして探索しましたが、当日の議事録等は見つけることができませんでした。

人科創設に携わった先生方は、人間科学は、諸科学の集まりか、統一科学かを論議しておられ、多くの先生は、諸科学の集まりであるとお考えのようでした。創設された学部の英語名として、人間科学は、Human Sciences という複数形になりました。先生方は、「複数形は、人間科学が諸科学の集まりであることを示します。将来、統一科学として単数形になるか、否かは、今後に託します」と言われました。

私は、人間科学部在職中、学生に、「あなたの研究は人間科学ですか」という質問をよくしました。それは 創設時、「今後に託す」と言われた先生方へ、私がすべき返答の他者転化で、学生の皆さんには申しわけなく思っています。

人間科学部への期待

人間科学部の各分野がそれぞれ独創性を発揮し、一層の発展をとげることを期待しています。

心理学について述べます。近年、全国的に見て、心理学部がいくつか創設されています。それは、心理学という特定分野のなかの取り組みであり、阪大人科における広い分野との共存による取り組みと対照的です。いずれの取り組みも心理学の発展をもたらしますが、阪大人科のように広い分野との共存の方が、心理学の各分野の独創性をより発揮できると私は思います。

独創的な研究には、3つが大切です。第1は、単純に、何か新しい問題はないか、学問分野に限らず、幅広く課題を探ることです。第2は、自身の研究に関連する他分野と交流し、情報を集め、文献を読むことです。第3は、数は少なくとも、他分野の研究目的を理解し、研究方法を着実に身につけることです。このなかで、第3がとくに大切であると思います。

阪大人科においては、他分野の研究が身近にあるので、独創的研究が生まれる豊かな素地があります。阪大人科における独創的研究の一層の発展を期待しています。